



Title	池上禎造教授の退官にあたって
Author(s)	宮地, 裕
Citation	語文. 1974, 32, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68617
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

池上禎造教授の退官にあたって

宮 地 裕

池上禎造先生は、昭和八年三月、京都帝国大学文学部を卒業され、同副手・講師を経て、昭和十七年三月、第三高等学校教授、昭和二十二年八月、京都大学教授、昭和四十年七月から大阪大学教授となり、文学部国語学講座の初代教授として、八年八か月のあいだ、学部・大学院学生の教育にも尽くされるところがおおきかった。

先生は、そのことばによれば、「夢のある古代の国語にあこがれるところがあったからだろうか」、はじめ、上代国語の音韻研究にすすみ、アルタイ系言語の特徴の一つとされる母音調和の痕跡を、古事記の仮名表記を手がかりとして上代国語に見いだされた。「池上禎造氏のこの説は……同一語根内において、*o* は *a・i・u* と共存し、*ö* は *ö* 及び *i* と共存する。*ö* と *a* との共存の例は少ない。言いかえますと、*o・a・u* と *ö* との非共存、*i* の中立性について述べたので、……有坂氏の定式化より完全であります。（池上氏は当時京都大学文学部の学生。）」（村山七郎・大林太良『日本語の起源』昭和四八年四月）という評価——これについて先生は、「そんな確たる根拠があつてのこととは言えない」と言われているが——も、その一例にすぎない。この処女論文以後、先生はその表記としての漢字を中心とする文字史研究にすすみ、漢語を中心とする語彙史研究におよび、さらに、それらをひろく言語生活乃至は言語生活史の問題として位置づける構想のもとに、広義国語史の研究についての貴重な礎石のかずかずを、論文としてのこしつづけてこられた。

上代から中古・中世・近世、さらには現代にいたる国語史・言語生活史に関するおおくの論文については、これだけひろくふかい史的論究はすくないという定評がある。一二、例をひけば、「語中のハ行音」（昭和二四年四月）は、発音と表記と意味とのかかわりにおいて語という単位体の論を、主として史的に展開されたものであって、これも先生のことばによれば、「語の切れる切れないの意識とか表記の問題とか、いろいろにひっかかる大分かわつたもの」であるが、「わたくし自身としては、まあいいつもり」と言われるだけのことはあるユニークなものと言えよう。

また最近の『『棒』字の和用法』については、「……池上教授は三十余年も前から、この言葉の發生に興味を持ち、折りにふれて資料を集めてきたと書いている。気の遠くなるような話だが、語史探索のむずかしさとおもしろさをあらためて教えらるる研究だ。」と紹介されたこともあるもので（毎日新聞昭和四八年一月十日）、一つの文字を追って三十年ということは、「気の遠くなるような」ことと感ぜられるにちがいない。

しかし、根気がいいだけなら、学界ばかりでなく世間ザラにあることで、めずらしいと言っても知れているが、先生の研究は、もとよりこれを文字史・語彙史・言語生活史のからみのなかに位置づけて、網のむすび目の一つとして認識されたときに、はじめて価値がわかるたぐいのものであらうとおもう。その意味では、先生の論文はやさしくない。精緻な考証のかなたを見とおさなければならぬからであり、先生は網全体の素描はされるが、網そのものを編み上げようとは、なさらないからである。網そのものを期待するのは人情の自然ではあるが、しかし、網が眼前のものではなくてもいいではないかという気が、わたくしにはする。それが見えるか見えないかは、後進の眼力の問題かもしれないからであり、さらにあえて言わせていただくなら、先生は、人がらはごく散文的なかただが、生きかたは多分に詩的なかたのようにも、おもわれるからなのである。

先生の業績は、昭和十九年発足の国語学会三十年のあゆみのなかでもおおきいし、国語審議会第七期から第十期までの八年余のあゆみのなかでもちいさくない。いずれも、ひとの目に直接見えるものではないが、ひろい意味で、学問と教育への、ふかい貢献があらう。西日本の国語学徒にとどまらず、陰に陽に、さまざまなおかげをこうむり、影響を受けてきたかたがたも、ずいぶんな数に達するだらうとおもわれる。さる三月二四日、研究室として最後のおはなしを学生たちとともにうかがうことができたとき、後進にのこされたことばは、「みずからを知れ」ということであった。自分のしごとの位置やレベルを省察し、みずからの限界や分を知って、「真理に対して謙虚であってほしい」と、簡潔に述べられた。「第三の人生」においては、社会学・人類学・民族学等とのかかわりにおける言語の問題への興味・関心がふかくなりそうだとおもうかがった。言語・国語への先生のひろくふかい目は、一層かがやくこととおもわれる。

ひさしく教導を受けてきているもののひとりとして、先生のますますの御健勝と御発展を、切に念じないではいられない。いささか蕪辞をつらねて、感謝と惜別のおもいを述べ、本学関係同行のかたがたの御芳情にもよる本特集号を、先生の机下に呈する次第である。

昭和四九年四月